

Reading Seminar: Spring 2024



第9回 川嶋みどり『看護の力』（岩波新書、2012年）

リーディングセミナーでは、近年、大学界隈において話題の、高校生向けに書かれた（または高校生にも考えて欲しい）、新書や文庫を1冊、取り上げ、参加者で読書体験を共有します。

・前回の模様

今回は、川嶋みどり『看護の力』（岩波新書、2012年）を取り上げます（[出版社の案内](#)）。著者の川嶋先生は、看護師として、また看護学者として、日本の看護教育をリードしてきました。本書は「自然に治る力を引き出す」ことを看護の営みの原点とする著者のエッセンスが詰まった一冊です。看護に興味がある方はもちろん、広く医療に関心がある方の参加をお待ちしています。

- 図書は各自、書店や図書館で入手して下さい

重要 | ポータルサイトへのアクセス制限

- メンテナンス作業のため、3月28日は終日、KUGS高大接続ポータルサイトにアクセスできません

日時

- 2024年3月29日（金） 14:00-17:00

会場

- 金沢大学 角間キャンパス
 - インキュベーション施設 A302（3階）
 - [Google Map](#)
- 公共交通機関（via 北陸鉄道バス）
 - バス停（乗り口）
 - 金沢駅兼六園口（東口）8番乗り場
発 93・94・97金沢大学行き（兼六園下経由）
 - バス停（下車）：**金沢大学自然研前**
 - インキュベーション施設まで徒歩5分
 - 時刻表（北陸鉄道バス 公式サイト）
 - [金沢大学行き/金沢駅行き](#)

注意 | バス停から会場までのアクセス

- 北陸鉄道バスを「金沢大学自然研前」で降り、連絡橋（南アカンサスインターフェース）を渡ってください
- 連絡橋を渡ったあとは右手に進んでください。一番奥の建物が会場です

- ・インキュベーション施設の入り口はわかりにくく、プレートもかかっていません。
新学術創成研究機構を目指してください（建物は連結しています）



南アカンサスインターフェース（入り口）



南アカンサスインターフェース



南アカンサスインターフェース（出口）ここを右手に進む

Note | キャンパスの雰囲気を味わってみよう

- ・南アカンサスインターフェース（出口）を左手に進むと、もう一つ、連絡橋が出てきます（北アカンサスインターフェイス）。橋を渡った先が、1年生の共通科目、人間社会学域のメインキャンパスです
- ・この時期の上記エリアは新入生があふれており、大学の雰囲気を味わえます。時間があれば、散策してみましょう
- ・大学の飲食店を利用できます。会場最寄りの食堂は[ナカフクリ食堂](#)です。北アカンサスインターフェイス手前にある「中福利施設」の階段を下りてください



新学術創成研究機構（右手）



新学術創成研究機構（正面玄関）

Note | その他

- ・服装の指定はありません

事前課題

- ・提出先：[Google Form](#)
 - 開催日前日（3月28日（木）23時59分）までに、課題に答えてください
 - 当日は、事前課題をもとに、参加者で議論し、紹介文を作成します

オンライン

- ・接続方法：Zoom

配布資料

- ・オンラインストレージ：[Google ドライブ](#)
- ・[ウェブページ](#)

紹介文（担当分）

- ・提出先：
 - [Google Form](#)
 - Zoom（チャット）

アンケート（受講の感想など）

- ・提出先：[Google Form](#)
 - 翌日（3月30日（土）23時59分）までに回答下さい

連絡先

- ・担当講師（苅谷）：kariyach@staff.kanazawa-u.ac.jp
- ・入試課：076-264-6082

重要

- ・当日、体調不良などで急きょ、参加できなくなった場合は、簡単で結構ですので、上記のメールアドレスに連絡下さい

その他

- ・このプログラムは金沢大学KUGS高大接続プログラム（大学での学び）の対象です
- ・特別入試に興味がある方は[公式サイト](#)をご覧下さい

紹介文

皆さんは看護師と聞いて、医師のアシスタントであるというイメージをもったことはないだろうか。川嶋みどり著『看護の力』は、看護および広く医療業界を目指す学生はもちろん、医療を受ける可能性のある人であれば、誰が読んでも、看護師という仕事の真髄を正しく理解する助けとなる良書である。

著者は実際の患者の例を挙げながら、看護のもつ本当の力について説く。看護師の仕事は、診療の補助に限らず、患者の自然治癒力を引き出すことがある。そのために看護師は、手で触れ合い、よく観察して、患者が人間らしい生活をすることを整える必要がある、という。そのような看護を阻害するものは何か。著者は、看護現場の慢性的な人手不足を問題視する。人間本来の自然に治る力に看護師が働きかけるためには、人間らしいケアの可能な医療現場を目指して、看護師が働く条件を整える努力が必要だ。したがって著者は、機械や市場原理に振り回され気味な現在の医療システムに異を唱える。

本書が説得力をもつのは、最先端の医学よりも目の前の患者にかかる豊富なエピソード、事例が紹介されているからだ。たとえば、医師に脳が死んでいて、意識は戻らないと宣告された患者の例が挙げられている。このような患者に対して、ある看護師は毎日欠かさずケアをしたという。彼女のケアによって45日後に意識が回復し、社会に復帰できた。著者はこのエピソードから「医師の宣告に左右されて早々と諦めるのではなく、最後までその人の命の可能性を信じてケアをすること」が大切であるという教訓を語る。脊髄の悪性腫瘍がある少女の垢を取り続けた看護の例も感動的だ。このような看護の目的は患者を清潔に保つということだけではない。呼吸をする、ご飯を食べる、排泄する、動く、止まるなど、私たちが当たり前にしていることこそが、私たちの命を守っていることを思い出させてくれる。読者は、このような記述から、看護師が患者に親身に寄り添うことで助かる命、生きる希望があること知るだろう。

本書を読んで教えられ、また考えたことは、看護は看護師だけの特権でなく、私たちの普段の会話、動作なども看護である、ということだ。看護師に限らず私たちも、著者のいう「治る医療」を日常生活でも行えるのだ。とはいって、このような「治る医療」を実践するには、川嶋のような看護経験豊富な者の声に耳を傾ける必要がある。だからこそ、看護師という職業が、決して医師の従属部ではなく、患者に寄り添う誇りある、独立した仕事であることを実感させてくれるのである。

金沢大学News

- ・後日掲載予定です